

アンパイア（第2話）

県東地区新人戦。1回戦4試合が、鹿嶋市高松緑地公園で行われていた。第2試合が延長戦になり、第3試合終了は午後3時を過ぎていた。第4試合主審の押見は時計を気にしながらの試合になった。

新人戦は10月に行われ、午後5時を過ぎれば空は暗くなり、午後5時30分には真っ暗になる。高松緑地公園には照明があるが、なるべく照明は使わない運営を心掛けるように、大会本部から釘をさされていた。

第4試合は、1点を争う好ゲームとなった。5-5の同点で最終回の7回裏は2アウト満塁になった。この時、時刻は午後5時を過ぎていた。

カウントは2-3になった。もし、次の球がボールならば決着がつき、ストライクなら延長戦に突入する。私はピッチャーがフォアボールをおそれ真ん中にストレートを投げると思った。

『あっ…。』ピッチャーから投げられたボールは落差の大きい縦のカーブ。ストレートだと思っていた私は、少し頭の位置が動いてしまった。カーブはバッターの胸のユニホームの文字のあたりを通り、キャッチャーミットに収まった。キャッチャーの捕った位置は真ん中でも、縦のカーブはボールと判定する審判は多い。バッターはこの球をボールだと思って見逃し一塁に歩くそぶりをした。キャッチャーは祈るような気持ちで、ボールを捕り、私のコールを待った。

シーンとなる球場。時は止まり、皆が私のジャッチを待った。

『ストライク、バッターアウト。』私は、右手をつきだしストライクのコールをした。すると、バックネットの後ろから『とったかー。』という大きな声をした。振り向くと20人以上の先生方が試合を見守っていた。

試合は延長戦に入り、照明が点灯された。延長8回、9回でも決着がつかず特別ルールになった。午後6時30分、ついに死闘に決着がついた。勝敗はあの時、カーブを投げたチームが勝った。つまり私があの一球を『ボール』と言っていれば、勝敗は逆だった。中学生の試合としてはあまりにも遅い時間になったので、試合が終わった時、たくさんの役員の先生、両校の校長先生、そして大勢の保護者が集まっていた。

球場外で審判服から着替えていると、名将が私の所に来て、横に座った。

『お疲れ。長い試合だったな。』私は名将に聞いた。『あの一球、先生だったらとりますか？』名将はタバコを吸いながら答えた。『俺は、高め厳しいからな。でも、良く投げたよカーブ……。押見、選手や親の顔を見て見ろよ。』

球場の外には、死闘を戦い抜いた選手達と保護者がいた。

『みんないい顔をしているだろう。そういうことだよ。』

『ナイス、ジャッチ。』名将は私の肩をポンとたたいた。